

目次 - もくじ -

ごあいさつ	1
30年に寄せて	2
目次	3
寄稿/第30回しまね映画祭に寄せて	4
第30回しまね映画祭 記念展	14
しまね映画祭の歩み	32
しまね映画祭 上映作品一覧	44

第30回しまね映画祭に寄せて

佐野史郎
是枝裕和
龍村ゆかり
錦織良成
おがち
安来のおじ
日下部元孝
北川れい子

杉谷 宥男氏を悼む

「しまね映画祭」開催30周年、おめでとうございます。

初めて「しまね映画祭」に参加させていただいてから、あっという間に四半世紀以上が過ぎてしまいました。その後「しまね映画塾」塾長の錦織良成監督と「RAILWAYS」などでご一緒させていただいたり、故郷での撮影の数々も思い出深く心に残っております。

振り返れば、豊かな自然に恵まれた神話の故郷、島根、松江での少年時代～思春期に出会った映画館での名作の数々には、あらためて感謝するばかりです。

けれど各地で映画館が少なくなってしまった現在、映画鑑賞を、かつてのように常に体験する機会は、決して多くはないかもしれません。

だからこそ、決して郷愁ではない、現在進行形の映画体験を提案し、届けてくださる、新たな神楽、神事ともいべきこの映画祭が、皆様にとってかけがえのないものとなり、未長く続きますようお願いして止みません。



佐野史郎(俳優)

《プロフィール》

俳優。島根県松江市出身。

1975年、劇団シェイクスピア・シアターの創立に参加。

1980年、劇団状況劇場(唐十郎主宰)に移籍。退団後、1986年、林海象監督『夢みるように眠りたい』で映画主演デビュー。錦織監督『たたら侍』、ドラマ『ずっとあなたが好きだった』など、多数の映画・テレビドラマに出演。

第30回しまね映画祭

映画祭は続けることが一番難しく、
だからこそ価値があると思います。視



第5回、第8回 しまね映画祭 【シネマ&トーク】ゲスト 是枝裕和/映画監督 より

祝！第30回しまね映画祭

地球交響曲 第九番

龍村 ゆかり

映画祭を支える皆様は
地域に夢や希望、生きる喜びをもたらす。
未来を創る大切な存在です！！

2021. 9. 25
しまね映画祭 初日

第30回しまね映画祭 テーマ映画「地球交響曲 第九番」

龍村 ゆかり / プロデューサー より

しまね映画祭、30周年おめでとうございます。

令和の時代、映画を鑑賞する環境は大きな変化をしていますが、先輩方が映画館の少ない島根で、映画を大スクリーンで観ようではないかと紡いでこられた映画祭に、改めて思いを馳せています。

近年、アメリカ映画の撮影はフィルムに戻るなど4Kや8Kのデジタル撮影よりフィルムの方が高画質であると見直されています。日本は、デジタル至上主義から脱却できていませんが、アナログのフィルムに回帰しているニュースは、しまね映画祭が予てよりスクリーン上映に拘ってきた意義を感じます。

祭りや伝統芸能が配信やリモートでは伝わらないのと同様、観客が集まって大スクリーンでみんな一緒に観ることで味わう醍醐味が映画にあると思います。それを経験する人が少なくなっているのは残念なことです。デジタル化は大歓迎なれど、人が動き、繋がって、触れ合い、顔を合わせることでしか成立しない文化が沢山あります。便利さだけを追及し、個を優先させることが進めば地域は壊れ、何も残らなくなってしまうのではないかという危機感を胸に、島根発の映画祭の行く末を見守り、応援していきたいと思えます。

デジタル化によって撮影や編集が簡易になっても最後は人が何を考え、生きているのか、を掘り下げた作品を大スクリーンで観たいものです。

時代の流れに沿っていくことも大事ですが、愚直に護っていかねばならないものがある、伝えて行かなければならないものがあります。

映画は単に娯楽というだけでなく人生を変えることもある文化。

島根だからこそ出来るしまね映画塾は撮影経験のない人なども多く、出身も職業も違う老若男女が一堂に会して合宿撮影をするワークショップ。

そこには数々の人間ドラマがあります。

効率化とは無縁の大切なものがたくさん遺っている島根だからこそ、映画のアナログの醍醐味を伝えて行こうとするしまね映画祭、映画塾がこれからも続くことを祈っています。



しまね映画塾 塾長

錦織良成 / 映画監督

祝！30周年！！しほ映画祭の
たくさんのお名前をありがとう！！
生きる希望をありがとう！！
これからもよろしく哀愁！！

おぐち
Happy!! (笑)

おぐち / フリーアナウンサー

しまね映画塾クロージングイベントでの司会や、
エフエム山陰での「しまね映画祭コーナー」パー
ソナリティーなど、長きに渡りしまね映画祭を支
えてくださるおふたり。
これからもよろしく哀愁～～！！

おぐち・おぐち・おぐち
しほ映画祭
30周年
しほ映画祭

安来のおじ / シンガーソングライター

第30回しまね映画祭開催おめでとうございます。

僕も映画人生31年目入りしましたので、ほぼ同い年ですね。

島根にこんなにもたくさん映画を愛してくださる方々がいらっしゃる事を本当に嬉しく思います。

映画塾との出会いは『RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語』の編集集中に錦織良成監督から、「今度しまね映画塾に来てくれないか？」と軽くお誘いを受け、「ああ、イっすよ。」と軽く返事をしたのが最初だった様に記憶しています。

実は映画監督は副業で大学とか映像系の専門学校とかで講師をしている事が珍しくなくて、過去にも何度か似た様なお誘いを受けた事はあったのですが実現せず、「ああまたいつものヤツだ…」って思っていました。錦織監督ごめんなさい！（猛省）

しかもその後「本当に行って欲しい」って連絡もらった時も、ウチの子が生まれて5カ月だったので「約束したから行きますけど、帰りたくなっちゃうかも…」って言ったり。

ところが島根に来てみたら楽しくて一度も家に電話しないという…

これ恥ずかしいんであんまり言っていないんですけど、30周年記念にいい機会なんでお話しします。

僕がしまね映画塾に参加させてもらう様になった11～12年前ってちょうど映画がフィルム(アナログ)からデジタルへの移行期だったのですが、そのころ僕は「フィルムで撮らなきゃ映画じゃ無い」みたいな今思うと変な固定概念があって。そんな折にしまね映画塾に呼んでいただいて作品に参加させてもらったり、ビール飲んだり、塾生さんと交流したり、ビール飲んだり、温泉入ったりして、「ビデオカメラで撮った5分の短編でも心が動く。これは『映画』だ」って僕の中で映画の考え方が変わったんです。

あのままだったら僕は間違った方向に突き進んで、もしかしたら映画の仕事続けて無いかも知れませんが、アカデミー賞も無かったかも知れません。僕を変えてくれたしまね映画祭・しまね映画塾には感謝しかありません。後何年編集者として現役でやっていけるかはわかりませんがその先もしまね映画祭・しまね映画塾には携わっていただければと心から願います。

しまね映画祭・しまね映画塾、お互いに良い年を重ねて行きましょう。

僕の方が1年先輩ですけどね。



しまね映画塾 編集講座担当

日下部元孝 / 日本映画・TV 編集協会

うわっ、凄い、素晴らしい、30周年を迎えた「しまね映画祭」。

決して派手ではないけれども、スタート時から《環境》をメインテーマに掲げ、ドキュメンタリー、話題の劇映画、アニメーション、更に日本の名作、旧作などを、映画館のない県内各地の会場に届ける「しまね映画祭」は、3カ月に及ぶ開催期間といい、実に画期的で、実に頼もしい。

ちょっと横道にそれるが日本には今年34回目を迎える「東京国際映画祭」はじめ、100を優に超える大小さまざまな映画祭がある。開催期間も10日間から1日限りまでいろいろで、主催する組織や団体も、国や自治体が絡んだ映画祭から、映画ファンたちが自腹で立ち上げたような映画祭もある。

町起こしや地域の活性化を狙った映画祭も有ると聞く。

…が、島根県民会館が中心になっている「しまね映画祭」は、何よりも、映画館のない各地域に、娯楽文化、娯楽芸術としての映画を届けたいという純粋な熱意が感じられるのだ。

映画は不特定多数の人が、スクリーンを見上げながら観てこそ、面白さも、感動も大きくなり、記憶にも残る、という信念。

私が「しまね映画祭」と出会ったのは、確か1990年代の中盤で、市町村合併が始まる前、上映会場も現在よりずっと多かった。しかも満席になることもたびたびで、皆さん、映画を待って下さっているのが、会場からひしひしと伝わってきた。

そして「しまね映画祭」から生まれ、今回19回目を迎えた実にユニークな「しまね映画塾」。

誰でも自由に参加して、映画作りの面白さを体験する「映画塾」は、塾長・錦織良成監督の実践的なアドバイスと、熱い映画愛、その魅力的な人柄人気で、塾生はいまや全国規模にまで広がってきている。

継続は力なり。

「しまね映画祭30周年」、自分ごとのように誇らしい私である。



「しまね映画祭」と「しまね映画塾」の勝手応援団長★

北川れい子 / 映画評論家



～ 追悼 ～

起ち上げから30年にわたって「しまね映画祭」を支え、けん引してこられた杉谷宥男さん（映画祭実行委員会前委員長）が2021年8月に亡くなられた。映画祭、映画塾の準備の真っ最中。突然だった。

杉谷さんは、幼少の時から独りでも映画館に通った世代。邦画、洋画、アニメなど「なんでも観た」と。記憶力もすごい。作品名、監督、俳優の名前ばかりか各シーンの印象もすらすら口をついて出てきたことを思い出す。77歳だった。

山陰中央新報社学芸部で机を並べて仕事をされた斎藤敦さんに杉谷さんの在りし日を偲んでもらった。

しまね映画祭実行委員会副委員長 西尾俊也



杉谷宥男さんのこと

山陰中央新報社の学芸部に配属後の3年半、第2土曜の夜は決まって島根大前のおでん屋で過ごした。島根県民会館の名画劇場を見た後、芸能担当デスクの杉谷宥男さんに友人たちとの集まりに交ぜてもらっていた。

杉谷さんの知識は幅広かった。ミュージカルを中心とした演劇、ジャズやクラシック、歌謡曲。映画の話も盛りだくさんだ。酔うほどに話は熱を帯び、大ファンだった美空ひばりさんやお気に入りの映画になると、もう止まらない。面白がって聞くうちに、あっという間に日付は変わってしまっていた。

杉谷さんのすごいところはそれだけではない。小田実ばりの「何でも見てやろう」という姿勢だ。ザ・ブルーハーツや大江千里、久保田利伸、プリンセス・プリンセス…。気になるアーティストの公演はファンの年齢層なんか気にせず、必ず会場に行き、自らの目と耳で確かめた。当時50歳前の中年のおっさんが、である。

山陰は都会に比べて、舞台やコンサートに接する機会が少ないという声を昔から聞く。それを都会に出て行く理由にする若者もいる。否定はしないが、ちょっと違う気もする。都会なら自分の好きな分野だけでおなかはいっぱいになる。でも杉谷さんのように、どんな分野でも一流どころが来れば、とりあえず接してみるというのもありだ。少なくとも1980～90年代の松江には杉谷さんのような「何でも見てやろう」という貪欲な人たちが結構おられた。今にして思えば、それはまちの文化のバロメーターでもあった。

しまね映画祭は島根県内から映画館が消えていくという危機感から始まった。杉谷さんは当初から実行委員会にかかわり、上映作品の選定やイベントの企画、果ては会場での司会までこなしていた。その思いはおそらく「なんでも見てやろう」から一歩踏み込んで「見られなくなるなら、自分たちで何とかしよう」と想像している。

本人は松江駅近くの旅館に生まれ、周辺は県内随一の映画館集積地。当然よく通ったそうだ。映画祭で汗をかくことは、芸能文化を愛する松江人の矜持でもあっただろう。2021年8月5日に急死。愛情を込めて映画や舞台、音楽を語った杉谷さんの熱量に達していない自分がもどかしい。

山陰中央新報社編集局 斎藤敦

第30回しまね映画祭 記念展



会期:2021年9月22日(水)～30日(木)

場所:島根県民会館 プロムナードギャラリー

【入場無料】